

あべこべの心理学

永田 円了



Paradoxical Thinking

「あべこべ」とは、ええ！そんなこと！！と思うようなこと。例えば、女と思っていた人が男であったり、その逆に、男かと思いきや女であったり、まるで頭の中の既成概念が壊れてしまいそうなこと。実は、その「思い込み」の破壊こそが今回のテーマなのである。

ああ、死にたい



ある酒屋さんでのこと。ご主人が夜になると「ああ、死にたい、死にたい」と言う。奥さんが「私は一体どう答えたらいいのですか」と、私に尋ねられる。さて、どう答えよう。

これを「あべこべの心理学」で対処してみよう。死にたい、の逆は「生きたい」である。このご主人は「生きたい」のである。でもどうやって生きたらいいのか、「頼むから教えてくれよ！」との叫びが「ああ、死にたい」という、あべこべのコトバに置き換えられている、と解釈する。また、つっぱりの高校性が「先生、人を殺して何が悪いんや」と突っかかる。あべこべの心理学では、これを「先生、人の命の尊さを教えてくれよ！」との叫びと読み解く。

この世とあの世は、あべこべ

え、そんなバカな、と思うかもしれないが、どうもそのようなのである。科学的根拠はないにしても、日本の習慣では、人が亡くなると、着物はこの世とはあべこべの左前に着せる。死者の枕元の屏風は逆さに置く。この世の夕べは、あの世の朝。夜の初めのお通夜は、あの世では朝の始まり。あの世に送り出すには、あの世が、明るい朝でなければならないのである。



また、この世の死者は、あの世の生者。葬式では、死を悼んで涙を流す。でもあの世では、「お帰りなさい、無事に帰れたね」と笑顔で迎えられる。命の誕生は、この世では大きな喜び、でもあの世では「使命をちゃんと果たせるだろうか」と不安な声に見送られる、と言う。(梅原 猛『日本人のあの世観』中公文庫より)

あべこべにして気づくこと



シェクスピア作『十二夜』では、このあべこべの心理を巧みにシナリオに表している。捨助の台詞に「味方はさんざん、あっしのことを褒め上げたあげくにバカにするが、敵は正直にアホウと言う。これ即ち、敵によって己を知ることなりだ」

“公然の敵のほうが、偽りの友より良い” (An open enemy is better than a false friend.)
ううむ、なるほど、相手に良く思われたいが故に、人にただ優しく接してくる友よりも、歯に衣を着せず辛辣な批評をしてくれる御仁のほうが、自分の為になる、ううん、その通りだ。一見いい人のように見えるが、あべこべの心理学で読み解くと、そういうことか！

人間関係の真理は、400年前のシェクスピアの時代も今も変わらないということか。

< 事例 >

- エッセーのだまし図 『コウモリと天使』
- NHK クローズアップ現代 「希望を科学する」9/14/2009
- 寺山修司 『現実をイリュージョンによって覆す』 ETV 「甦る巨匠」
- 水木しげる 『人間は、生きながらにして解放されているのが最高』
- アーサー・ピナード 『不思議の国のアリス』 NHK 視点 論点 8/27/2009
- Ninagawa 『十二夜』 2009年6月ロンドン公演より
- 板東玉三郎 『女よりもっと女を演じる』NHK「プロフェッショナル」1/15/2009
- 河合隼雄 「自己実現は、バラ色にあらず、自己実現とは、あきらめなり」
生きる～こころと健康～ 住友生命健康財団主催
- 米映画 2001年 『愛しのローズマリー』 ～外見だけで女性を選ぶハル～
- 新婚さん、いらっしゃい 『女は顔じゃない』 9/6/2009
- 中村中(あたる)、「喝采」を歌う

